

かささぎ 通信 第85号

毎月第2金曜日 13:30~15:30

2019年 10月 11日 発行

刈谷市中央図書館研修室 参加自由

森三郎刈谷市民の会「森三郎の作品を読む会」

二〇一九年九月の「森三郎の作品を読む会」では

「森三郎作品の理解を深めるために」(2)

保澤やす子さん(森三郎さん「長女」を囲んで)

と題して、お話を伺いました。

保澤やす子さんからは二〇一五年四月にもお話を伺い、

その会の様子は「森三郎の作品を読む会」会誌『かささぎ』第2号で紹介しました。今回は森三郎さんの東京時代の生活(一九二五〜一九四五年)について、お父様の森三郎さんから伺った話をいただきました。やす子さんのお話の詳細は「森三郎の作品を読む会」会誌「かささぎ」第4号で紹介する予定です。

東京時代は、(一)川上児童楽劇団の時代、(二)『赤い鳥』の時代、(三)『赤い鳥』終刊後〜終戦までの三つの時期に分かれます。

『赤い鳥』終刊後、三郎さんが大きな影響を受けた人が、柴田宵曲さんです。宵曲さんはお兄さんの銚三さんの生涯の友人で、『日本人の笑』(一九四二年)、『書物』(一九四四年)などの共著があります。三郎さんは宵曲さんのことを「三重吉先生を私の第一の師とすれば、柴田氏は先生亡きあとの第二の師と呼んでも差し支えない人であった」(『赤い鳥』の歴史(2))『赤い鳥名作集』第二巻付録、一九七三年)と言っています。宵曲さんの日記『柴田宵曲翁日録抄』(『日本古書通信』第四四七〜七四九号)の中には、銚三さんと三郎さんとのつながりがたくさん書かれています。

銚三さんの先の奥様が虫垂炎がもとで亡くなった(一九三九年十二月三日)後、銚三さんを訪ねた宵曲さんは日記に「一切のもの旧にかはらず。本箱の上の写真と線香と新に憂を誘ふ。」と書いています。そして「寒燈やありしまゝなる立鏡」という句を詠んでいます。

一九四〇年、森家のお父様が亡くなった後、お母様は上京して三郎さんと暮らしていますが、一九四五年一月十三日の三河大地震の後、三郎さん母子は刈谷の家の様子を見るために帰省します。お母様は二月に風邪をこじらせてそのまま刈谷で亡くなってしまいます。これは「いのちの花輪」(『幼年童話集 帽子に化けたクロネコ』所載、一九四九年二月発行)という作品に出て来るエピソードです。宵曲さんは「母堂郷里に逝去」と知り「今更の如く人の世の頼みがたきを感じず」と書いています。後にこの本を三郎さんから贈られて、宵曲さんは「中に空襲当時のことあり、この空気を知れるもの、おそらくは我ならむ」と「いのちの花輪」について日記(一九四九年二月二十三日の項)に記しています。

宵曲さん自身の奥様が亡くなった時にも「名状すべからざる感」と言い、基督教による告別式を終えた後、「この夜最も寂寥」と素直に心情を吐露しています。宵曲さんは奥様との結婚記念日のこともしばしば日記に書いています。例えば一九四三年十二月七日には「十五年前の結婚の記念日なればあげものを作り牛肉の缶詰をあげなどして食膳を賑はす。」、終戦の年一九四五年には「結婚記念日なれば赤飯と蕎麦の汁粉食ふ。」と書いています。でも一九三九年の記述は「けふは結婚記念日なり。感慨多少。」とだけです。前述したように銚三さんの先の奥様文字さんが亡くなったのが四日前の十二月三日で、宵曲さんとしては感慨深いものがあつたのでしよう。宵曲さんの優しさが感じられます。

三郎さんは東京で空襲に遭い(やす子さんの話で三回と分かりました)、一九四五年六月一日に刈谷に戻りましたが、翌年の四月二十六日の宵曲さんの日記に「森三郎君より来信、頃日はじめて童話の筆を執りしよし」と書かれています。三郎さんの創作活動を理解する上で貴重な資料です。

会誌「かささぎ」第4号は来年二月発行予定です。

次回「森三郎の作品を読む会」十一月八日(金)午後一時半〜三時半

「春告鳥」(『森三郎童話選集 夜長物語』所収)